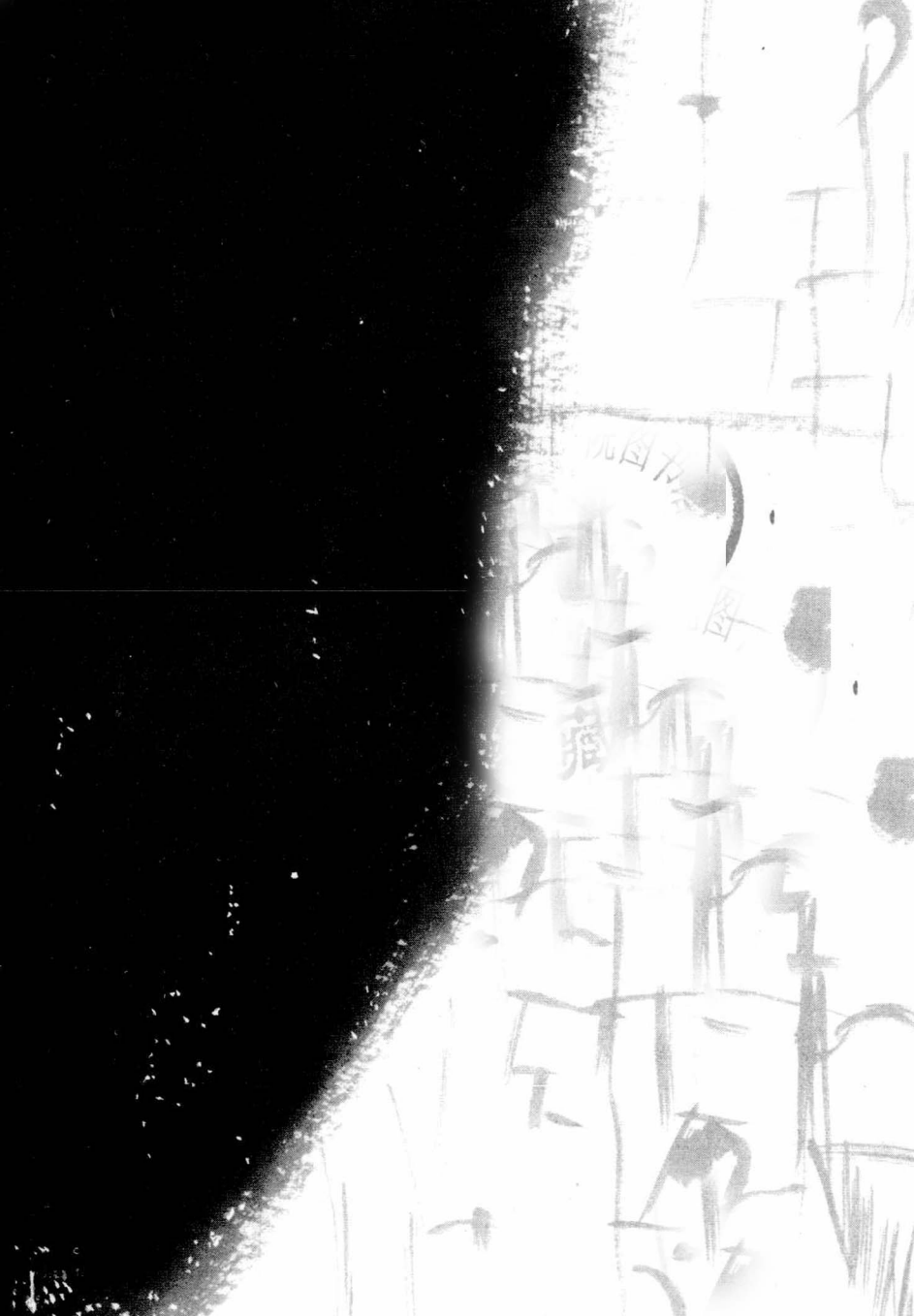


木の實のとき



© Printed in Japan, 1962

木の家のとき

著者 田宮 虎彦

昭和三十七年十二月一日印刷
昭和三十七年十二月五日発行

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話
東京(341)七一一一 振替東京808

印刷 株式会社金羊社
製本 神田加藤製本所

長篇
小説 木の実のとき 目次

湖のほとり

五

街

三四

春

九

旅

二〇

富士

一六

炎

一四

北の町と北の湖

二四〇

真夏の日射し

二〇〇

装
幀
・
脇
田

和

木の
実の
とき

湖のほとり

一

河口莊、湖畔莊、岳北レークホテル……河口湖畔の家並にきらめきならんでいたネオンサインが右うしろに消えていったと思うと、道は、自動車のヘッドライトが黄赤く浮き出さした二つの円錐形の視野だけをのこして真暗な闇にのまれてしまった。舗装された道がしばらくつづき、やがて、その視野の両側を、ぶな、くぬぎ、ならなどの黄褐色に赤茶けた枯葉がトンネルのようにつつんだ。紅葉しつづいた楓が、時たま、さつとその黄褐色の枯葉の中に真赤な絵具のようにきわだって、うしろへ流れ去っていった。

運転手のハンドルをにぎった手の間から、スピードメーターが朱のいろにそまっているのが見えた。それは道がカーブにかかると緑いろにかわり、また朱のいろにあざやかにそまった。雨に濡れた赤土の道がヘッドライトの中につづいていた。いつか舗装された道はつきていた。

順太郎が、その枯葉のトンネルと赤土の道をみつめてい

ると、フロントガラスを雨滴がぼつとたたきはじめた。

「また降り出しやがったな」

運転手の眼がバックミラーにちらつと光ってから、順太郎にはなしかけるといふよりも、ひとりごとをつぶやくように運転手はいった。運転手は五十ぐらいの年輩に見えた。

「すみません、おじさん」

運転手の語気に思わず順太郎はいっていった。

「何もすまないってこたあないよ、こっちは商売で走ってるんだから」

バックミラーに光っていた運転手の眼には、それまで警戒するようないろがかたく消えなかったが、順太郎がそういった声が素直に聞えたのか、運転手ははじめてうしろをふりかえって順太郎を見た。

順太郎の乗った富士山麓急行の晩い電車おそが河口湖の駅に着いたのは、十時半をすぎていた。十一月も、もう末近かった。まだ紅葉が残っているといっても、秋雨が降りつづいた山深い終着駅に降りた客はまばらであった。順太郎はバスの時刻表を見上げてみたが、バスはもうとくに終車になっていた。数少ない人がが河口湖畔の家並の方へおり

ていったあとになつて、順太郎はレーンコートの袴^{はかま}をたてて、駅前^{えきまえ}にそこだけ明るく灯がついているハイヤーの営業所までおりていった。

「精進湖までいってくれますか」

奥の方で動いた人かげに順太郎は、ガラス戸をたたいて、ぼそつといつた。

順太郎は一人でハイヤーに乗ったことなどなかった。

順太郎は中学校を出てからずっと街の酒屋ではたらいでいた。その店の主人の名前をそのままつかって坂井屋といつた小さな店で、店員は順太郎が一人だけであつた。その店で、もう五年半余り、順太郎は御用聞きをしては配達にまわる外まわりの仕事をして来ていた。

営業所のガラス戸をあけた若い運転手が、セーターの上にレーンコートを穿^はそうに着た順太郎を、しばらくじつと見つめていてから、

「今頃、精進湖まで何しに行くんだね」

といつた。

「姉がホテルで病氣になつたらしいんです」

「ホテルはどこだね」

「精進ホテルっていうところだそうです」

「精進ホテルだって——」

若い運転手はそうするどくいつてから、営業所の奥に、「精進ホテルはもう休業してるな」とどなるように声をかけた。

「そんなはずはありません、夕方そこから電話がかかつて来たんです」

あわてて順太郎はいつてから、レーンコートの内ポケットから手帳を出した。手帳には——精進湖ホテルと坂井が書いてくれてあつたメモがはさんであつた。

「精進湖ホテルです」

メモを読みなおしてというと、営業所の奥から出て来た先輩の運転手が、

「精進湖ホテルと精進ホテルとは違うんだよ、精進湖ホテルなら営業してるよ」

といつた。

先輩の運転手と若い運転手とは営業所の奥にはいつていつて、そこで何か小声で話しあつていたが、やがて、先輩の方の運転手が出て来て、ガレジの中の小型車に乗った。そして、しばらくエンジンをつかしてから、

「行きますよ」

と順太郎にいつた。

フロントガラスをたたいている雨がはげしくなつて、運

転手はワイパーのスイッチをいれた。ワイパーが扇形の弧をえがいてうごきはじめた。うしろをふりかえって順太郎を見てから、運転手の声が安心した声になって、

「姉さんが病氣してるんだって——？」

と順太郎にはなしかけて来た。

「電話だけで、それも自分が聞いたんじゃないからよくわからないんです」

「そういえば、おととい、精進湖ホテルへお医者さんのをせていったな」

順太郎は、ふっとそのお医者さんというのが姉の多津子を診察するためにホテルへ呼ばれていったのではないのかと思つた。そう思うと、運転手にもう少し深く問いかけてみたい思ひにかられたが、運転手の声には好奇心がかくされてゐた。順太郎は、気づいて、

「紅葉がきれいですね」

と別のことをいった。

「紅葉はもう終つたよ」

運転手はそつけなくいつて、

「あんたは学生さんかね」

と問いかけるようにいつた。

「酒屋の店員です」

運転手は、おや——という顔をして、もう一度、順太郎をふりかえつて見た。それから、

「紅葉がきれいだったのは十日も前だよ、赤いいろがもうどすくろくなつてしまつた、姉さんが病氣するなら、もう十日も前にしてもらえばよかったな」

とぞんざいに笑い声をまじえていつた。

雨の道がひどくなつて、一台だけすれちがつたトラックが、自動車のウインドに泥しぶきをまともにねとばして走り去つていつた。

*

順太郎は、姉の多津子のが不安であつた。順太郎に電話をかけて直ぐ来るようにいつて来たほどだから、病氣はわるいに違いなかつた。順太郎の耳に、順太郎をよんでいる多津子の声が聞えて来ているように思えた。

順太郎は、その日、夕方、もう薄暗くなつて、その日の二度目の配達にまわつてゐた。坂井屋ではたらくようになって、もう六年近くになつてゐたから、毎日の仕事は眼をつぶつていても順太郎には出来るようになってゐる。順太郎の仕事は、毎日、午前中に得意先きをまわつて注文をとり、午後二回にわけて、午前中、注文をとつて来た品物をとどけてまわるのだった。その二回目にとどける品物も、

自転車の荷物台の籠に、醬油が一本とクレンザーが二箱、それだけが残っているだけになっていた。

坂井屋のある吉祥寺の街は、五日市道路から横町にはいると、古い檜葉の生垣と新しいブロックの白い塀とが交互にいきまじってつづいている。そんな横町を順太郎はゆっくりペダルをふんでいっていた。あと、その醬油とクレンザーとをとどける一軒だけが残っていた。順太郎がその得意先きへまがる曲り角まで来た時、臍脂のセーターを着た笛子が、自転車のペダルを思いきりふんで走って来るのが見えた。

順太郎は片足をおろして笛子が通りすぎるのを待った。自転車をそんな走らせ方で走る笛子を、順太郎は、時々、見ていた。はらはらするような早さで、軽業でもしているように走るのが笛子は得意であった。しかし、その時は、もう薄暗い夕暮が横町にやどみはじめていた。その上、その日は一日中、雨が降ったりやんだりして、その時も、また小雨がばらついていて、笛子がいくら自転車を上手に走らせることが出来たにしても、そんな時刻に、そんな走り方をして、安全であるといいきるわけにはいかないのだった。

「笛子ちゃん、そんなめっちゃめちゃんな走り方して、あぶな

いじゃないか」

笛子に声がとどくほどになると、順太郎は呼びかけるように声をかけた。だが、笛子は、そのままスピードをかせぎ、ずっと順太郎のそばまで走って来て、びたりととまる

と、
「順太郎さん、たいへんなのよ、すぐお店に帰ってよ」といった。

「いったい、どうしたんだい？」
おどろいている順太郎に、笛子は、おっかぶせるように、

「お店に順太郎さんのお姉さんから電話がかかって来たのよ、病気だから順太郎さんにすぐ来てほしいんですって」といった。

曲り角から二、三軒さきの得意先きに、品物をとどけると、順太郎は店まで笛子と競走するように自転車を走らせて帰った。

「姉さんが急病で富士山の麓のホテルで寝こんでしまったんだそうだ、すぐ行かなきゃ、今夜中に行けないぜ」
順太郎が自転車から降りないうちに、坂井が店の奥からどなるようにいった。

「駅に聞いたら、八時に高尾を出る電車に乗らなきゃ駄目

だそうだよ、それに乗れば、大月で乗りかえて、十時半頃、河口湖に着くんだ、そこまで行けば、あとは何とかして行けるだろうってよ」

「順ちゃん、早く着替えて、すぐ行っておあげ、知らないところで病氣しちゃ心細いもんだよ」

坂井の妻の澄代が台所から顔を出していった。

順太郎の部屋は店の裏二階にあった。狭い急な梯子段をかけあがっていくうしろで、澄代が、

「笛子ちゃん、すみませんでしたね」

と笛子にいつている声が聞えた。笛子にしらせてくれた札をいうのを忘れたなと思ったが、順太郎の心は多津子のことでもいいになっていた。電話に出たのはホテルの人で、熱が高いということだけがわかったというのであった。

——熱が高いというとなん病氣なのだろう。

あわてて身仕度して出かけていく順太郎に、坂井が千円札を幾枚かたんでわたしてくれた。

「五千円だ、困るようなことがあったら、遠慮せずに電話をかけるんだよ」

坂井は、順太郎の肩をたたきながら言った。

「順ちゃんのお姉さんは、友達とでも、そこへ行ったのか

ねえ」

澄代も店先きまで送って出て来て、順太郎にいった。

*

自動車は、ヘッドライトで雨脚を白くうかし出しながら、山間の真暗な闇をひきさいて走りつづけていた。順太郎は、ぼんやり姉の多津子のきれいに澄んだ瞳を思い出していた。多津子の瞳は、真黒い瞳孔のまわりに、かすかに緑いろをふくんだ灰いろの小さな虹彩のひだがよっていた。そして、そのひだに、ひとつだけ黒い小さな点がぼつんとついていた。

「——順ちゃん、どうして、そんなに見つめるのよ？」

順太郎がそんな姉のきれいな瞳をみつめていると、多津子も順太郎を見つめて、いった。多津子が順太郎を見つめた時、多津子の瞳孔に、小さな自分の顔がうつっているのが見えたことを、順太郎は思い出した。

「——どうしてって、姉さんの眼、とても、きれいだからさ」

その時、順太郎はそうこたえたが、あれは何時のことだったろう。四、五年前、坂井屋ではたらきはじめて、まだ一、二年しかたっていないかった頃、晴れた春の日に休みをもらって、多津子のアパートへいった時のことであつたよ

うに思えた。

姉の多津子の眼がきれいなことは、もちろん、ずっと前から順太郎は知っていた。

しかし、それまで、眼がきれいだというよりも、姉のどこもかもが全部きれいだと順太郎は思っていた。そんなきれいな姉のあることが、順太郎には誇りであった。多津子は、背は高いという方ではなかった。しかし、多津子は肌の色がすきとおるように白かった。多津子の色の白いことと眼のきれいなことは二人の死んだ母の喜美恵に似ていたのであった。

多津子と順太郎とは、歳は四つしか違っていないが、順太郎には、多津子はずっと年上の姉のように思っていた。気丈な多津子にはもとそんなところがあつたのだが、母が死んで、父の善作が不意に失踪して、多津子と二人だけで残されてから、順太郎は、多津子にいつそうそんな思いをつよく感じるようになっていた。

だから、順太郎は、店の休みの日に多津子のアパートに行つて、姉がいてもいなくても、姉の部屋に寝そべって時間をすごすことがたのしみであった。きれいな姉が部屋にいる日は、もちろん、いっそうたのしかった。順太郎が多津子の瞳がことさらきれいだとはじめて気づいたのは、そ

の頃の、ある晴れた春の日で、やわらかい春の日ざしさがさしこんでいる窓の下に寝そべって、順太郎のシャツのほころびをつくらつてくれている多津子を見上げている時であった。きれいな色白な多津子が、ちよつと眼をよせて、こまかにほころびをつくらつてくれていた。その多津子の眼が言葉でいいあらわせないほどきれいなことに、その時、順太郎は気づいた。

それから、順太郎は、多津子をたずねていくたびに、多津子の眼を、多津子に気づかれないように、いつも、そつと見るようになった。

順太郎と四つ違いの多津子は二十五になっていた。順太郎がはじめて多津子の眼のきれいなことに気づいた頃から、多津子は少しずつかわりはじめていた。同じようにきれいであつたけれども、順太郎にも、その多津子のきれいさが少しずつ違ったきれいさにかわっていくのがわかつた。店の休みはその頃はまだ月に一度であつたが、その月に一度の休みの日に順太郎が多津子にあいに行くと、そのたびに、ふつくとまるみをおびた女らしい美しさが、多津子の頬にながれて来ていたのだ。

ふつと、そんな思い出が消えて、一人でホテルで寝ている多津子のこと、順太郎の心をしめつけた。それは、順

太郎が吉祥寺の駅で電車に乗った時から、高尾で大月行の電車に乗りかえた時から、そして、また、うすいレーンコートにしみとおるような山間の寒さを感じながら大月の駅のプラットフォームを走って、河口湖行の電車に乗りかえた時から、ずっと、くりかえしくりかえし、順太郎の心をしめつけて来ていた不安であった。

そんな不安にしめつけられると、多津子のきれいな眼にみるみる涙がうかんで来た時のことが順太郎に思い出されて来るのだった。それは、父の善作が二人を棄てて不意に失踪したとはつきりわかった夜のことであった。たまたまの上に身体を投げ出したまま、多津子はじっと眼を見ひらいていた。泣くまいとしていたのかもしれないが、涙が多津子の眼にあふれて来た。その夜の思い出が、二重にかさなって順太郎の心をしめつけていった。

「運転手さん、まだですか」

順太郎は、運転手にとにかくけた。

「土砂降りになったね」

不意にといかけられて、運転手は答にならないことをこたえた。落葉松の林の中の道を自動車は走っていた。フロントガラスには洗うように雨が降りつけていた。落葉松の林がつきて、杉の古木がしばらくまばらにつづいた。

「こんなに降っちゃあ、またどこかで崖くずれがありそうだよ」

運転手がいった。ヘッドライトが照らし出した明るみの中の、一方の崖が赤土の山肌をむき出していた。

「あそこは、先月終りの颱風の時の雨でくずれたんだ、それを、やっと片づけたばかりなんだよ」

多津子のことが胸にいっぱいになっている順太郎には、そのくずれた赤土の山肌がフロントガラスいっぱいにせまって来た時になって、やっとそれに気づいた。赤土の山肌が順太郎の眼をかすめてうしろの暗闇にのまれていった。

「運転手さん、まだなかなかですか」

いっそう不安になって、順太郎は運転手席にのり出すようにして、もう一度、といかけた。

「もうすぐだよ、すぐそこで右に折れて、トンネルをぬければ、ホテルのあるところへ出るよ、あと五分とかからないね」

運転手はそうこたえて、急カーブをきった。

「そこが、精進湖だよ」

暗くてよく見えなかったが、小さな池のような水面がにぶく右手にうかんで見えた。ヘッドライトの中にトンネル

がうかび、トンネルをぬけた。ひろい湖面が見え、薄暗い灯のかたまりが二、三カ所、湖面の向岸に、雨にぬれたフロントガラスをおして見えた。

風がまいて、雨は、いっそう激しく降りつけた。自動車はホテルの玄関にすべりこんで、順太郎がドアをあけた時、玄関の灯りがまたたいて消えた。正面の帳場から懐中電灯のまるい灯りが順太郎を照らした。

「電話してもらった吉島です、姉がお世話になっているそうで——」

順太郎がいうと、

「ああ、磯貝さんだね——」

という男の声が懐中電灯のうしろから聞えた。

順太郎には、その声が、声のままで言葉にならず聞えた。

「電話してもらった吉島です」

順太郎は、もう一度、自分の名前をくりかえしていった。

二

「姉はどんな工合ですか」

順太郎は眼がまだ暗闇になれないまま、懐中電灯のうし

ろの人に、せきこんで問いかけた。

「さっきから、お休みになっています」

別のところから女の人の声が聞えた。

「お前、案内しておあげ」

懐中電灯の灯りが赤い羽織を着た若い女の人をうつし出した。帳場にもローソクの灯がついて、懐中電灯を持った人の顔も、順太郎にぼんやり見えるようになった。ホテルの主人が支配人といった人のようであった。

「熱がたかくて、一時は心配しましたが、もうそんなじやなくなつて、私たちもほっとしたところですよ」

赤い羽織を着た人が懐中電灯をもって階段をあがっていった。

「お客さんは、これを持って下さい」

主人らしい人が自分の持っていた懐中電灯を順太郎にわたした。順太郎がうけとった懐中電灯の灯りの輪の中に先きに階段をあがっていく女の人の赤い足袋が見えた。二階の廊下が暗いトンネルのようにつづいて、また階段をあがった。いっそう寒々とした三階の廊下の奥に多津子が寝ている部屋があった。

先きにはいった女の人にうながされて順太郎が奥の襖をあけると、熱のある病人の息のこもった生暖かい匂いが順

太郎をつつんだ。多津子がそこに水枕すいまくらをして寝ていた。

「姉さん」

思わず呼びかけて、順太郎は多津子の枕もとに膝をついた。

「おくすりでおやすみになっているんですよ、おこさないであげて——」

順太郎には、じっと眠っている多津子が死んででもいるようにみえて、身体をゆすぶっておこしたい衝動にかられたが、やっと自分をおさえた。

「弟さんがおいでにならなかつたら、今夜は、わたしが付添ついでってあげるようにいわれていたんです」

多津子の寝ている部屋の隅に、別の寢床ねどがしかれていることに、そういわれて、順太郎は気づいた。

「最初の晩はうわごとばかりおっしゃっていましたわ、四十度何分という熱でしたもの、三晩、そんな高い熱がつづいて、昨日からやっと少し熱が下りました」

ひっそりした廊下に足音がして、少し年上の人がいいて来た。幾らか明るいランタン型の電池ランプを違ちがい棚の上におくと、その人は多津子の寝顔をのぞいてから、隅にしていたあった寢床を片づけ、順太郎のための寢床を多津子のそばに並べてしきはじめた。それから、順太郎の着かえ

るどてらや浴衣、魔法瓶にいった番茶、順太郎の寢床にされる湯たんぽなどを、二人は手際よくつぎつぎ運んで来た。

「お姉さんが眼をさまされたら、水枕をとりかえてあげて下さい、そこをあげると置いてございますから」

あとから来た年上の人が障子をあげると、二つむかいあわせにソファがおかれているペランダがあって、とりかえるための水枕が用意されていた。

「それから、この水薬を差しあげて下さい、弟さんがいらしていて、きつとおよろこびになりますわ、もしかあったことがありましたら、電話の受話器をとって下されば、女中部屋のベルがなることになっていますから、すぐまいります」

こまごまとした注意をひそめた声でかわるがわるして、二人が出ていくと、順太郎は、はじめて、一人だけで多津子のそばにのこった。ペランダのひさしをたたいている雨の音が急にはげしく聞えて来た。風も吹いていた。しかし、一人きりになると、その雨や風の音の奥に、あくまでしずかな山の夜のけはいが、かえって深く順太郎をつつみこんでしまうように思えた。

順太郎は着がえだけして、蒲団ふとんの中に脚をのばし、多津

子の顔をのぞきこんだ。

電気は何時までも暗く消えたまま、ランタンランプのはの暗い明るみだけが違い棚の上からとぼしく落ちて、多津子の寝顔に影をつくっていた。その寝顔は、静かな寝顔であつたが高い熱に疲れきっているとはつきりわかる寝顔であつた。

ひと月ばかり前の休みの日に、順太郎は、多津子がつとめている中野のデパートに多津子に会いにいつていた。その時、客と笑顔で応対している姉を見ていたが、その時と、すっかり人違いしてしまつたように、多津子の頬はやつれて見えた。

思ったほどわるくなかつた安心と、残っている不安とがいりまじつた落着かない気持で順太郎は多津子の顔を見ていた。不意に多津子が苦しうにうめいた。小さなうめきで、すぐ規則正しい寝息にかへつたが、順太郎はおどろいて、そつと多津子の額に手をふれてみた。それは、幼い頃、順太郎が病氣した時、父や母が、そして父も母もいなくなつてからは、多津子が順太郎の熱をみてる時のしぐさであつた。

多津子の熱はまだ高かつた。順太郎はあわてて冷たい自分の手をひいたが、多津子は気づいて眼をさました。

二人の眼があつた。多津子の眼は熱にうるんでいた。多津子は、しばらく、じつと順太郎を見つめていてから、

「順ちゃん、来てくれたのね」

と、かすれた声でいつた。

「ああ、一時間ほど前にやつと着いたんだよ」

「もう幾時かしら」

多津子の枕もとに小さな腕時計がおいであつた。二時近くになつていた。

「電話は幾時頃に通じたの？」

「六時頃だつたかな、すぐ来たんだけど」

はげしい雨の中をホテルの前に着いてから、一時間ほどしかたつていないと思つていたのに、時間は、あわただしく、いつの間にか二時間も過ぎてしまつていたのだ。

順太郎は女中にいわれたとおり、水枕をベランダの水枕ととりかえた。

「ずいぶん熱があるね」

「これでも下つたのよ、八度ぐらいにはなつてゐるわ」

「水薬のむんだつて——」

多津子は水薬をのむと、また眼をとじて、すぐうとうとと眠りにひきこまれていつた。この水薬は眠りぐすりなのかもしれない。薬瓶を持ったまま、しばらく規則正しくつ